

83. ふりだしにもどる

0910920090 林香苗  
指導教員 市川尚紀 准教授

商店街 洞窟 原点回帰

1. 設計趣旨

現在の商店街は新たな大型商業施設の建設や車社会の到来、人口流出などによる顧客の減少から、一部の商店街を除いて、地方では低迷してきている。それまでの商店街とは、人の往来が多く、その都市の中心街であった。今ではいわゆる「シャッター通り」と化し、人通りも少なく活気のない暗い空間が都市の中に生まれてしまった。

街にとっては寂れた商店街はちょっとしたお荷物であり、マイナスの存在であるのかもしれない。しかし、商店街には現代社会において、なくなってしまった、足りない、と嘆かれているものがまだ残っている。隣の家に醤油を借りに行くような暖かく緩いコミュニティである。ひきこもりやニートが増えている現在、商店街のもつ力に触れ、自己形成する。商店街は自分のこれからを考え悩む場となる。それは自身の原点となり、帰省したときに商店街を訪れ、自身の原点や青春時代を思い返す。本計画は、商店街の商業施設以外の新しい機能を見つけ出し、社会貢献に繋げていくものである。

2. 計画地概要

山口県萩市の田町商店街とその周辺を計画地とする。かつては山口県北浦地区で唯一の百貨店やスーパーマーケットチェーンの店舗があったが、これらの店は廃業または撤退し、現在は中小の店舗が残り、経営を続けている。一番の問題点としては顧客の減少である。商店街の近くに建設された大型商業施設に顧客を奪われてしまったことや道路整備によりメインストリートの冠を取られてしまったことが原因として挙げられる。その結果、昼間でもシャッターの下りた店舗が目立ち、隣接する空き地を隠すための壁に描かれた絵や貼られっぱなしのポスターが商店街のもの悲しさを引き立てている。しかし、商店街としての利用は少ないが、通り道としての利用は多い。特に児童、学生が多く、時間帯によっては商店街の人の往来が多くなることもある。



図2 計画対象地

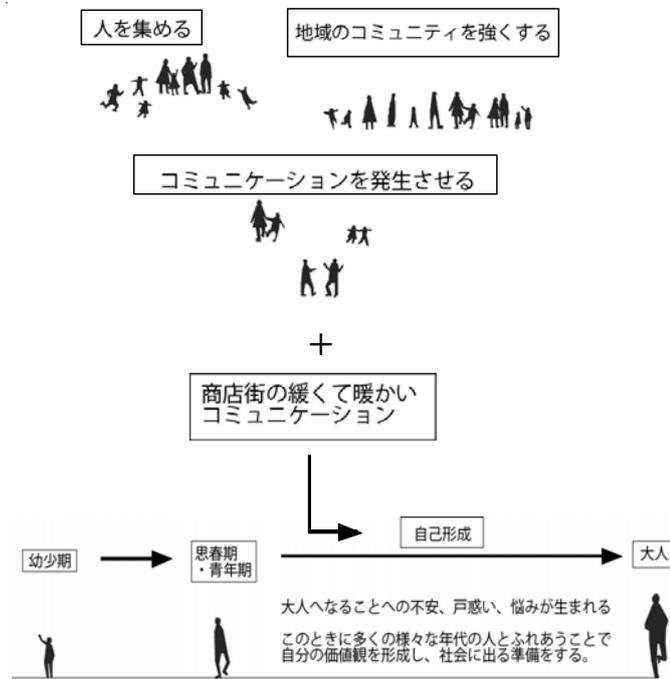


図1 コンセプトダイアグラム

3. 計画内容

建築の原点は自然にある。洞窟は壁、屋根、部屋があり、自然の中で現在の建築に近いものである。思春期にこれからについて悩み、考えたことは人生の原点となることが多い。本計画では、商店街を各々のこれからの活動の原点となることを目指す。一度まっさらな状態に戻って、様々な形で悩み、考える場を提供する。人には自分のベストな悩み方がある。その動作を空間に落とし込み、構成する



図 3 空間構成のダイアグラム

### 3.1 空間の詳細

壁の厚さや高さを変えて空間を作っていく。壁は完全に閉じることはなく、商店街のすべてのスペースは繋がっており、風や音、匂い等は壁により遮られることなく伝わる。それによってプライベートに近い空間も、他の空間と繋がりを断つことはない。店とも完全に分断されないで今までよりは気軽に入店ができる。

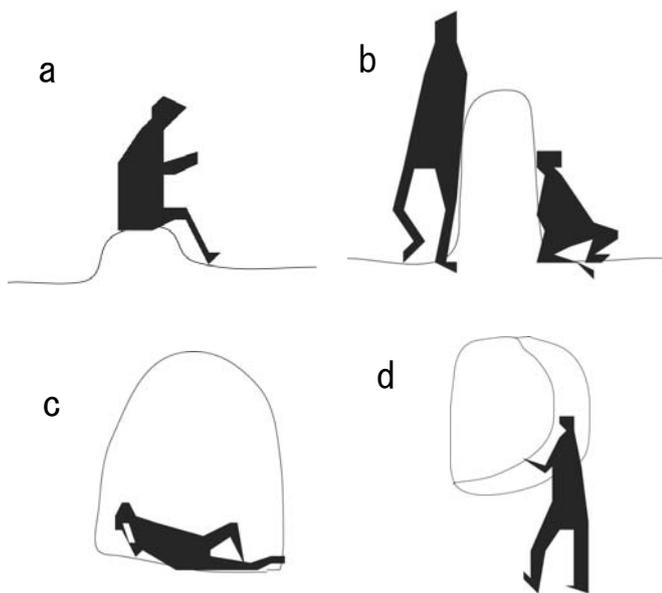


図 4 壁の操作例

a.b は高さの操作。c.d は形の操作。これらのように壁をいじって空間を作っていく。

### 3.2 計画地の景観

本計画の対象敷地は城下町の近くにあり、周囲には観光地や昔の街並みを残したままの地区もある。そのため、低層の建物が多く、高層建築物は景観を壊す恐れがある

ので、本計画の商店街は低層の建物とする。

## 4. 総括

今回の計画は、他の商業施設や車社会の発達、人口の流出など、様々な要因から衰退していった商店街の新しい役割を見つけることである。商店街とは物の売買を行うだけの場所ではなく、人々が集まり、コミュニケーションを発生させる場所でもある。それにより自己形成を行い、社会に適応する準備をしていく。世の中が殺伐とし、人との関わりが減ってきたと言われているが、商店街の中にはまだ昔ながらの人の温かさが残っている。子供たちはそうした人の温かさに触れ、成長していくことを願う。また、萩市は人口の流出が多い。それと同時に年末年始やイベント時には帰ってくる人も多い。その時に商店街を訪れ、自身の原点を見つめ直し、社会に立ち向かう心を作っていく。



図 5 洞窟空間のイメージ

## 建築概要

所在地：山口県萩市田町商店街

主要用途：商業施設

規模：1階建て